

ゲルシヨム

奨励	林 明基 [いむ・みよんぎ]
奨励者紹介	在日大韓基督教会京都教会伝道師

さて、メディアンの祭司に七人の娘がいた。彼女たちがそこへ来て水をくみ、水ぶねを満たし、父の羊の群れに飲ませようとしたところへ、羊飼いの男たちが来て、娘たちを追い払った。モーセは立ち上がりて娘たちを救い、羊の群れに水を飲ませてやった。娘たちが父レウエルのところに帰ると、父は、「どうして今日はこんなに早く帰れたのか」と尋ねた。彼女たちは言った。

「一人のエジプト人が羊飼いの男たちからわたしたちを助け出し、わたしたちのために水をくんで、羊に飲ませてくれました。」

父は娘たちに言った。「どこにおられるのだ、その方は。どうして、お前たちはその方をほうっておくのだ。呼びに行って、食事を差し上げなさい。」

モーセがこの人のもとにとどまる決意をしたので、彼は自分の娘ツィボラをモーセと結婚させた。彼女は男の子を産み、モーセは彼をゲルシヨムと名付けた。彼が、「わたしは異国にいる寄留者（ゲール）だ」と言ったからである。

(出エジプト記 二章一六―二二節)

寄留者であるモーセ

私は今、神学研究科後期課程に在籍しながら、在日大韓基督教会京都教会という韓国教会で伝道師として勤めています。伝道師とは日本キリスト教団でいう補教師にあたります。

今日は日本にある「韓国教会」、それも一九八〇年代後半からなるニューカマーの教会ではなく、戦前に建てられた、いわゆる「在日韓国・朝鮮人の教会」についてご紹介したいと思います。そう言いながらも私は在日韓国人ではありません。私と「在日大韓基督教会」との出会いからお話したいと思います。私が在日大韓基督教会と出会ったのは同志社大学神学部に入學してからです。ただ「聖書を深く学びたい」という思いで同志社大学神学部に入學しました。入學が決まってからも、そのときまで通っていた「純福音教会」（ニューカマーにより建てられた韓国教会）の京都教会に籍を移して通いました。

入學後のある授業のとき、入學試験の面接官であった先生から「同志社と関わりのある教会」に行ってみることを勧められ、在日大韓基督教会京都南部教会を紹介していただきました。そしてその教会を訪ね、そちらに籍を移すことになりました。私は在日韓国・朝鮮人の方々への伝道という思いがありましたので、ちょうどよい機会だと思いました。当時お付き合いしていた女性（今の家内です）が在日韓国人でありましたので、在日大韓基督教会へ教会籍を移すことに抵抗はありませんでした。

しかし、在日大韓基督教会に籍を移してから、思いもよらない壁にぶつかりました。それが「在日」という壁です。それは韓国からきた「わたし」には分からない「ざいにち」特有の感覚でありました。これから在日大韓基督教会で働くためにもこの「感覚」を知る必要がありましたので、調べてみることにしました。すると、在日大韓基督教会に勤めている同志社出身の先輩の方々が、ある一つの言葉について論文を書いていることがわかり、その言葉と「在日」との関係に関心をもちました。それが新共同訳聖書において、おもに「寄留者」として訳される「ゲール (ger)」という言葉です。

読んでいただきました今日の聖書箇所の一節をもう一度お読みします。

「彼女は男の子を産み、モーセは彼をゲルシヨムと名付けた。彼が、『わたしは異国にいる寄留者（ゲール）だ』と言ったからである」。

モーセが同胞であるヘブライ人を助けようと殺人を犯します。罪から逃れようとエジプトから逃げ出し、辿り着いた異邦の地において異邦の女性と結婚し、その女性は長男を生みます。その子を「ゲルシヨム」と名づけたというのがその内容です。

エジプトでの生活は、王女の養子ではありませんでしたが、ヘブライ人としてのアイデンティティがエジプト人として生きていくことを妨げました。その結果としての「殺人」ですが、彼のアイデンティティが表に出た出来事でもあります。しかし、同胞であるヘブライ人は彼を受け入れることができませんでした。モーセは一瞬にしてすべてをなくしてしまったのです。エジプト王女の養子としての「地位と名誉」を捨てたのですが、同胞であるヘブライ人からは拒絶されてしまったのです。両者から見捨てられた彼が向かった先は「荒野野」であり、辿り着いたのが「ミディアン地方」です。人助けがきっかけとなり、モーセはミディアン人の祭司「レウエル」の娘「ツィボラ」と結婚することになります。そこで生まれた長男を「ゲルシヨム」と名づけました。「私は異国にいる寄留者 (ger)」であるという自己反映です。

寄留者である在日

「寄留者 (ger)」という言葉について様々な研究発表があります。聖書がいう「寄留者」とは何か、それはどのような存在なのか。しかし、私には聖書に「外国人」または「異邦人」を表す言葉が他ににあるにもかかわらず、なぜ「寄留者(ger)」に「在日」が関心をもちつたのか。それについて興味をもつこととなりました。

この言葉をいち早く在日大韓基督教会に取り入れた方がいます。李仁夏（インハ）牧師です。私は牧師にお会いしたことはありません。私がこの言葉に関心をもち始めたころ、牧師の『寄留の民の叫び』という本と出会いました。直接会ってお話を聞いてみたいと思った矢先に亡くなりました。その本の一節をご紹介します。

「われわれの叫びは、それが日本社会に訴えるものであれ、その窮極（究極）の目標は、日本社会の決めてくれる価値意識に自らを同化させることなく、流れに抗っても、一つの創造的主体として生きようとすることである。そのことが自己の主体の発見につながるし、ひいては、日本社会に一つの意味をもたらす生き方につながると信ずるからである。寄留の民を創造的主体としてとらえようすると、旧約聖書から新約聖書的概念に移行しなくてはならない」（三ページ。カッコ内と傍点は奨励者注）。

彼は、日本で「外国人」として生きる意義を提示していました。また、「旧約聖書から新約聖書的概念に移行しなくてはならない」とも言っていましたが、しかし私は「寄留者(ger)」という言葉に捕らわれて旧約聖書を専攻し、今も学んでいます。実に在日大韓基督教会において、この言葉は大きな意味をもっていると感じているからです。また、私も日本における「寄留者である」からです。

在日大韓基督教会は、二〇〇八年に宣教一〇〇周年を迎えることができました。その「在日大韓基督教会宣教一〇〇周年記念事業案」には、記念事業関係において、KCC（在日大韓基督教会）神学の構築を関係事業として位置づける詳細内容として、一、在日神学確立、二、グローバル化の中で移住労働者などディアスポラ化した人々の解放の神学、三、新たに日本に定住する人々が増加している状況に応じて他者を主人とし自己を僕とする「寄留民神学」の構築、とあります。

本案における「寄留者ger）」理解はさておき、「寄留民神学」という言葉が使われています。「私たちは『異国にいる寄留者 (ger) である』。私たちの子供たちに『寄留者』として生きることを教える。そして、彼らを信仰に導く働きが教会にある」ということです。

しかし、そのような働きには、以前にできなかったことへの反省が含まれていると思います。つまり、在日二世と三世が日本の社会において苦悩していたとき、教会は彼らに「在日」として、そして「クリスチャン」として生きる術を教え、導くことができなかった、と李仁夏牧師はその本の中で言っていました。

なぜ、そのようなことができなかったのか。私は「在日大韓基督教会として一つの思い」をもつことができなかったことにあると思います。つまり、祖国が解放されたとき、多くの牧師は祖国に帰り、また、残っていた牧師もいずれ祖国に帰ろうとしていました。しかし、日本で生まれ育った二世と三世は、日本で生きることを選択せざるを得ませんでした。そのような彼らに対して教会はサポートすることができませんでした。それは「在日大韓基督教会」といながらも、本国の支那の教会にとどまろうとしたことに大きな問題がある、と李仁夏牧師は指摘しています。

在日大韓基督教会の総会が二〇〇八年度に調べた資料をみると、在日二世・三世の牧師と韓国から来て総会で按手(あんしゅ)を受けた牧師、そして韓国から宣教師として派遣された牧師は、ちょうど三分で割合でした。しかし、最近では宣教師を含めた韓国出身の牧師が全体の四分の三を占めているといわれています。在日大韓基督教会の中で、「在日」出身の牧師は減っています。それは、教会構成員の変化にも表れています。多くの在日二世と三世が教会を離れ、一九八〇年代後半からの新移民者が多数を占めるようになりました。在日一世から一・五世、二世、二・五世、三世、四世、新移民者、日本人と多様化しています。

そのなかで、「一つの思い」をもって「一つなる共同体」を目指していくことは容易ではありません。在日一世と新移民者の一世はその信仰の形態を「韓国教会」に求める傾向があります。しかし、その二世以降は必ずしもそうとはいえません。それでも、私たちは信仰の後輩に、私たちの信仰を受け継がせようと互いが助け合っています。

寄留者であるクリスチャン

モーセが息子の名前を「ゲルシヨム」としたのは「私は異国にいる寄留者(ger) だ」という自己表明であります。しかし、クリスチャンは誰もが「寄留者」であります。ペトロの手紙一 二章一節にはこのように書かれています。

「愛する人たち、あなたがたに勧めます。いわば旅人であり、仮住まいの身なのですから、魂に戦いを挑む肉の欲を避けなさい」。

ここで「旅人」と訳されているギリシア語がヘブライ語「寄留者 (ger)」の訳にも使われている言葉です。詩編三九編一三節はダビデの歌として記録しています。

「わたしは御もとに身を寄せる者／先祖と同じ宿り人」。

私たちにとってこの世は、一時的なものにすぎません。

また、エフェソの信徒への手紙二章を見てみたいと思います。

「実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律すくめの律法を廃棄されました。こうし

てキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました」（一四節）。

「従って、あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり、使徒や預言者という土台の上に建てられています」（一九節）。

キリストによって「二つを一つ」にすることができます。しかし、それは違いを超えた「一致」であります。コリントの信徒への手紙一 一二章一二節に「体は一つでも、多くの部分から成り・・・」という話がありますように、私たちが日大韓基督教会もその違いを超えて、「一つなる教会」になることを求め願っています。同じく、日本においても在日大韓基督教会は「寄留者(ger) の共同体」がありますが、「一つなる教会」でありたいと願っています。その違いを超えた一致こそが、真の教会であると信じています。

二〇一一年十一月十五日 火曜チャペル・アワー「奨励」記録